【新聞定価1ヵ月 4,037円(本体価格3,738円＋消費税299円)】1部売り(消費税込み)朝刊140円 夕刊50円 〔第3種郵便物認可〕

山谷で刻む命の名簿

生きた証し忘れない

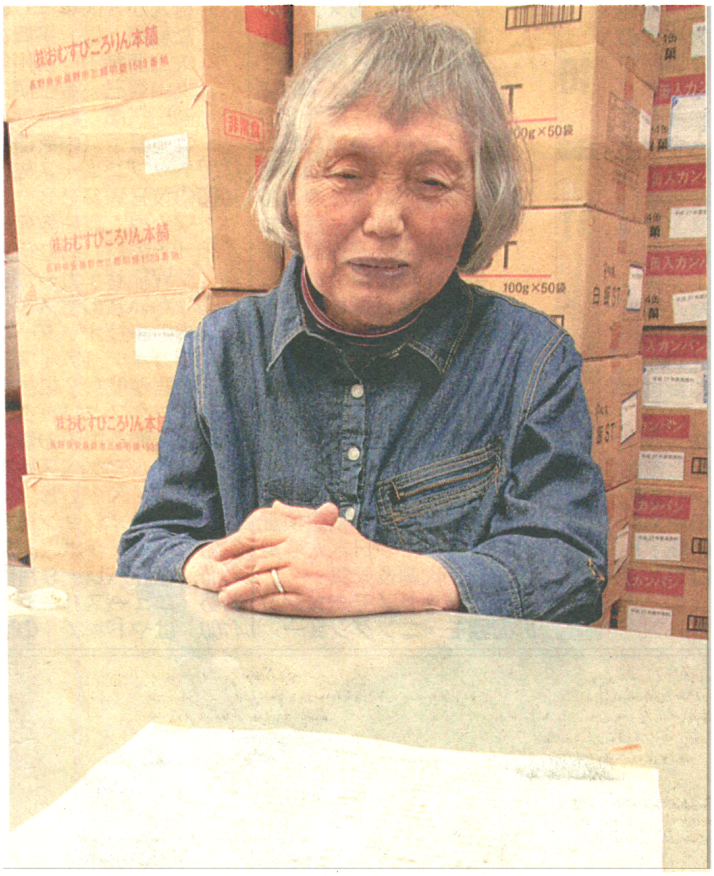
30年で80人 シスター見届け

東日本最大の寄せ場、東京・山谷地区で、亡くなった労働者やホームレスらの「命の名簿」を記録し続ける女性がいる。家族と疎遠になりがちな人が多い中、炊き出しや生活相談を通じて関わり、生きた証しを残そうと30年前に始めた。現在80人。一人一人の名前と、紡いだ思い出から山谷の歩みが伝わってくる。

【飯田憲、写真も】

「あの日は雪が降って寒かったからね」。山谷地区でホームレスらを支援する市民グループ「ほしのいえ」(東京都荒川区)の代表、中村訓子(ゆきこ)さん(75)がつぶやいた。今年1月、名簿に80人目の名前が加わった。

「いろはのおじちゃん」。本名は分からない。路上で暮らしており、近くの商店街の名前をもじって付けた。週1回の炊き出しに必ず並び、顔見知りだった。来なくなった直後、人づてに段ボールに身をくるみながら命を落としたと知った。



30年間記録し続けてきた「命の名簿」を見つめる中村訓子さん＝東京都荒川区南千住の「ほしのいえ」で

山谷との出合いは1987年、カトリックのシスターとして始めた夜回り活動だった。当時は街に活気もあったが、アルコール依存症で体を壊す労働者も少なくなかった。

そこで支援に当たった男性が肝臓がんで亡くなった。59歳。経済的理由で十分な治療が受けられず、一報を聞いて駆けつけた時、口から血が流れたまま放っておかれていた。

「同じ命なのに、扱われ方がこんなに違うのはなぜなのか」。その時、感じた憤りが原動力になった。男性のことを忘れまいと、名前と命日、年齢を記したのが、名簿の1人目となった。

アパートの一室を借り、「ほしのいえ」の活動を始めた。当初は山谷に暮らす人々との距離感が分からず、事務所の窓ガラスを割られたり、1年以上活動を中断したりした。それでも、依存症の対応や心理学を学び、居場所を作ることに腐心した。

活動が定着する一方、名簿は更新され続けた。自ら命を絶った人もいれば、餓死した人もいる。身寄りがなく遺骨を引き取ったり、死亡の際の状況を周囲から聞き取ったり。街の移り変わりとともに、20代から70代まで、さまざまな理由で山谷にたどり着いた人たちの命を見つめ続けた。

現在、山谷地区に住む人の平均年齢は66歳に達し、9割が生活保護を受ける。簡易宿泊所にこもったまま外出を控える人が増え、提供する炊き出しのおにぎりも1回につき400個とピーク時から半減した。「ここで暮らす人同士のつながりは年々希薄になり、孤独感は想像に難くない」

目に留まるよう、名簿は事務所の入り口に掲げている。中村さんは「これ以上名簿は増えてほしくない。でも、何年たとうと覚えているし、命の尊厳を守るのが私の仕事。体が続く限り、山谷で活動したい」と話す。

山谷地区

東京都の台東、荒川両区にまたがる簡易宿泊所の密集地。戦後、土木、建築作業などの労働需要が高まり、1963年のピーク時には、222軒の簡易宿泊所に約1万5000人が生活していた。バブル崩壊後、建設需要の低下とともに日雇い労働者は減少傾向で、利用者も高齢化。今は約150軒に約4200人が暮らす。現在「山谷」という地名は消えている。